

ンド語はロシア語と文法の体系が似ているのでロシア語の知識がずいぶん役に立ちました。でも厄介なのは「似て非なるもの」。ロシア語でこういうからポーランド語でもこうだろう、という類推が間違っている場合があります。ロシア語で「запоминать」（ザポミナチ）といえば「覚える」という意味ですが、ポーランド語の「zapominać」（ザポミナチ）は、なんと「忘れる」なのです。

これなど意味が正反対ですから、まさに false friends（偽りの友）ですね。でも、こうした異文化間の微妙な差異があるからこそ、世界は多様で面白いのではないのでしょうか。

この数年来、私は、ロシア文学に描かれた食卓風景を取りだしその役割について考えています。食事の描写など些細なディテールにすぎないと思われるかもしれませんが、あに図らんや、作品によっては大事な象徴の意味合いを持っているものもあり、楽しい発見の連続です。

外語祭では、たぶん新人生の皆さんも各国料理を作ったり食べたりすることと思います。せっかくの機会ですから、ただ美味しいとか珍しいというのではなく、対象地域の食文化を異文化として研究してみてはいかがでしょうか。食の歴史、行事食の意味、宗教や経済

と食文化の関係……さまざまな視点があるはずですよ。ちなみに、いま私のいちばんのおすすめ料理は、グルジア料理！ だれか外語祭でグルジア料理店を出そうという人いないかなあ。



ぬまの・きょうこ 東京生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。ロシア近現代文学・比較文学。著書に『ロシア文学の食卓』（NHKブックス）、『夢のありか―「未来の後」のロシア文学』（作品社）、『アヴァンギャルドな女たち―ロシアの女性文化』（五柳書院）、『家庭で作れるロシア料理』（共著、河出書房新社）など、訳書にツイブキン『バーデン・バーデンの夏』（新潮社）、トゥルゲーネフ『初恋』（光文社古典新訳文庫）、ウリツカヤ『ソーネチカ』（新潮社）など。

異文化としての料理のすすめ

沼野恭子

ずいぶん前の話になりますが、東京外国語大学のロシア語科一年生だったとき、六本木の「ウ・カリハ」というチェコ料理店で夏の間だけウェイトルスのアルバイトをしたことがあります。当時、外大にはまだチェコ語科もポーランド語科もありませんでしたが、何か東欧のことを知りたいと思ひ、実益を兼ねた「研究」をすることにしましたのです。

「ウ・カリハ」には、チェコ大使館の人がひとり毎日のようにやってきました。その人が来たら必ずプディングを大盛り（！）で出すことになっていて、私が運んでいくと、にこにこしながら「アリガト！」と言ってくれました。プディングはロシア料理にありません。同じスラヴ語圏なのに料理は違うのだな、とそのとき実感しました。

大学を卒業して何年かしてからポーランドのワルシャワに住む機会を得ました。あるときレストランに入り、「ボルシチ」と同じようなものだろうと思つて「バルシチ」を注文しました。「ボルシチ」はウクライナが発祥の地と言われていますが、今ではロシア料理の代表選手のようなもの。ところが、音は似ているしビーツを使うところも同じなのですが、ウクライナやロシアの「ボルシチ」が実だくさんの「食べる」スープだとすると、ポーランドの「バルシチ」はふつう実の入っていない「飲む」スープだったので。想像したものと違う料理が来たのでとまどつたのを覚えています。

「覚えてる」といえば、こんなこともあります。その当時ポーランド語を勉強していましたが、ポーラ